東行遊覧記

郵 イウ 境上ヒトヤトマリ行書舎也 因音尤
廣韻ニハ驛也置モ又驛也
風俗通ニハ漢改メテ郵ヲ為置 置ハ者
度ニテ遠近之間ヲ置之也 一ニ云馬傳ヲ
曰置 步傳ヲ曰郵 又サムル トガ 責也
又與尤同シ過也 又最也モツトモ 又姓ヲホシヰマヽ
多也 又田間ノ舎 又殿最 亦曰殿郵トモ 又
督郵ハ官ノ名 又高郵ハ邑名 又因是為ノ切
集韻ニ地ノ名在衛ニ

九曜文庫

矢島玄亮 記録

嘉永元申年夏四月日光杉山旅行維時
同道藤三年同道道中伊間大之丞明元年次
郎田沼名高友人之称池難縦ヲ見逢扨十七
八ニ候江戸駒込吉祥寺学寮ニ入ル云此候
連ニ而道中之人高橋矢剣ニ薬局体
「駒ヶ嶽ニ出来とぞ申しニ御座候
やはき此手跡其ここさ猶あり
嵩橋ノ町ニ而まきニ渋谷名付道実河り
り人を招く交想何事有之人筆御被
ありのを聞して

一 榛名山の名称は浴宮と
美しくなる文字来りけり
浴宮の茶店に逗留して大雪のはれを過
榛名山の歌を思ひ出し新田の先衛門の右手の方に
見渡せば山から下る松杉生茂り日影もさし入ぬ程也
昔徳川家御家氏此山にて逗入念り聊りしと云所
なり山上に八幡大神宮鎮座なり 里村市の子せ
出る仏様あり
一 是までの事どもを実に徳河乃
一 見られ山の名有御座なり

此處より山中法蔵寺町有り右手の中程に徳川家の
菩提所の法蔵寺と云ふ有り松杉の樹茂り昔代々の御
鈴木源五郎弟幸十二 小田原在所より参詣有けるに
寺中に入りて計と行より世の志ありける人の
来りて申さく名剣鈴木弟子にや看板にて有り
家の役は御幣なり鈴木弟子不残宿に休み
亦其後八幡大に依て日光往来源義経の功臣
鈴木三郎重家其後代々鈴木源五郎重幸是なり
八代目当時鈴木勘右衛門重安と云 鈴木源五郎
紀州藩白隠生より代々参詣に相成候也其時

殺生人ヲ殺こ出るも首ヲ切の僧正の長光の短刀
ヲ以テ首ヲ切毎首ヲ水ニ洗フ一家来初メ切腹嚴
上下ヲ預ケト云リ家ヲ立行隠ニ山手ニ佐川
十八松本ハ経長及松本源七郎ト云ル家臣ヲ数十ケ
此御役ヲ相勤ル中ナ山跡ヲ乞フテ出タリ難ヲ免サレ
三人ハ路ト西ノ山ヨリ長キ日モ西ニ傾キ入合ノ鐘ヲ
此赤坂宿ニ入ル此辺ノ松並木尾ヲ東方ニ中ル白
「雲ト見エシ東ニ山ヲ西ニ見ル
入日赫ク赤坂ノ中ニ
赤坂ト云吉田ヲ以テ橋ト云フ三百余ノ大橋百廿間

或書曰
海潮溢テ
今切ト云
云

明応八年
濱名の橋
落テ今切ト
云

川豊川ノ流ヨリ家ヲ過テ二川ニ至ル越ヘテ
方ニ山中岩上ニ唐銅ノ走ル處ノ観音一体
アリ右中ニ見ル處ノ霊ハ此所ノ謂ヲ聞ク昔此ニ濱名
橋ニ中古ノ地ナ陸ニ出テ周リ浮ミ出テ本陸
或ハ夜ニ其夜ヨリ観音ノ夢想アリテ像ヲ
夜中ニ山手ヨリ退キ野ニ移シ長シニ三里程ノ坂東
北ヨリ山ニ満ル大洪水ニ而ニ荒井ノ池一里余
押流シ南海ヘ白海ト成ルニ依テ今切ト云唐銅
観音の像ハ何ト云ニ建立ト云此観音像少シキル処アリ
水走ナリ足ノ所ハ何ニ此処ニテ堂中ニ池田家

鎧蝶ニ定役せる桂打村五兵衛ハ目附ミ手ナト遣
名洲欽 主洋

一 飯倉の江 茶ありにて山潮波

一 何ゝ井乃水や流れ誰か通人

二河志ゝすかし間ニ遠く境アリ。汐見坂之
東ハ宮一の岸脈灘しく南大洋海より打
寄浪北岸ニ音ハ霹靂乃如く峰海り汐煙輪も
雲ゝ霧不異然ト凄シク見へけれハ

一 打寄浪ゝ風景殊寄の事也
目見ゝしく立汐煙りけり

○

猶く眺望ニ志ゝ夜かな客も越荒井の関ゝく
旅りヲ石人切し渡舟ニのり不尽人ニあれハ
◎ 東路の濱名の海り越にり富士乃禁を米日ゆくん
海とよう解夜ふ宿りゝ又明ハ晴天ゆり浜名
濱也塚ハ通り行ゝ天龍河舟渡のりゝし

一 古郷之今ハ浦ゝ遠ツあゝ多し

一 天乃中河ゝら渡ゝて来る

天龍川ニ流ツ越ニ出ゝ見附駅日夜出て袋
井小宮ゝ早朝立去掛川日坂さやの中山ニ来り
西行の歌を思ハ出ゝく安ニ記ル

一まさしく文銘さと云へるや舎ありさやの中に山
挟夜は中山かりき川里合谷なり　是れ▲蹊遠境
河なり　此を大井河と云ふ　河は只一堂を櫓ヶ肩ニ
乗せ東西旅人を上て渡集其派ともいまもちら人
一急瀬奔流不受舟東西旅客渉沙邉
一土人諳水如平地櫓得籃輿已在肩
一目に渡る業なれ得ニ而早眺ると心
一心ありて仕ゐ肩なれ守への形
大井河は越ニ而金谷の驛にて到着して蒔枝
越国部ニ中ちる早夫に立る宇都の山に越鞠子は

先谷を門探舟越ニ而驛の久能山より道へ入ル
則東海道の本道なり。○久能山ハ入海横の巡り
山ニ入り南に葉尾に入る登山の案内伝数く平人の説く人成
手を科當日樹に守遺ス依く山寺門ニ来れ是頗る
又同じ心掛り渡く帰る霊所より案内ス則微細ニ拝覧スルニ
正面中央に東照大権現をまつり山王摩多羅神なり　扨
天井八俗ニ檜鹿尉香散ト云桩ニテ細密ナル組子ル帳面ニ
緑青ニテ彩りたるニ際する三十六哥仙ハ後水尾院様
御宸筆にて深きかなし連瓚ニテ殊更入る同ある
御筆跡なり　三代宗光将軍上洛ニ御拝領ニテ

剣此處ニ有又正面ニ掲東照大権現額ハ宸筆
左右ニ玉簾金ヲ光輝ケリ家光将軍ノ建
立ノ極彩色五重ノ塔及楼閣云々手植ノ高野松
アリ其傍ニ一社アリ高坊在高直年奉納馬ノ
画土佐長山ノ御殿ニ並テ納馬ノ画藤原曲信筆之
小栗谷喜吉ノ御殿房奉納馬ノ画狩野探幽筆之
田沼意致奉納ノ画法眼栄川ノ筆ニ粗
めぐり見侍る此処ヨリ少シ下ル山本勘助ガ堀ト云ナリ
水上三十五町水中九町半許アリト云ナリ 巳箕城用意
うるとしと云り

一 山すそのかりうらにふる山にあるて
めぐり見て旅ひと眺のあるよし
此處ヨリ眺望ハ東南海上ニ三保の松原ニ
又東北ニ富士ヨリ高山ノ高山峠ヘ眺望絶景也
実ニ万ナリ是ヨリ府中ニ出此所府中ヨリ 狩波
講中ノ籠料 鳥目壱百文ナリ
府中ヲ出ルニ江尻駅マデ五里ノ半ナリ江尻ヲ
出テ二里程行テ清見寺ヲ見テ山上ヘ登ル
沖津ヲ経テ薩埵峠ヘ登ル 此峠ハ富士ノ御眺一ノ世ニ有ルベシ
佳景實ニ言葉ニ述ベ難ク此眺望ニ長閑ニ眺メ入ルベキ

一 雨もなく雲霧晴ニ成て久かたのそら
ひかりに錦を出したる如く流る如し
一 此より駿州薩埵峠ハ始りまで
一 不盡山ハ其空晴るゝとのふきも見えた
眺望ハ晴川し 蒲原由井より一里
半 此ハ蒲原領ニ至 藤川舟渡し越て吉原驛ハ
原まで此間三里半 此所なる在原業平朝臣
冨士の和歌あり
○ 時しらぬ山ハ冨士の根いつとてか鹿子まだらに雪のふるらん
此和歌ハ思ひ出べく

一 さる人のよまれ方にたとへたる一の哥
鹿の子まだらなん雪れ不盡の山の歌
原より一里半程で沼津之宿ニ成 三嶋ニ一里半
此間ハ駿豆（スルガイヅ）境あり 三嶋を過て豆相（イヅサガミ）境あり
箱根山ニ名ある降出れ共難所なる歟
一 お越ん折しも嶺松くもりて雨ふく
岩ふみなりやせ足から坂
峠に至 此山ハ世ニ云る箱根山ト謂ニ云 此間無
四月八日ニ深山の花ともいろ〳〵咲きと斉月
備りたる小せき堂中ニ湯沐浴仏灌頂シ一人僧

鐘ヲ鳴ラシ香ヲ焚振袖ヲ見テハ彼誕生佛ニ浴
させ侍るブツく嘱る真おく賽銭給ニ附
ちらしたり
「世ニ憐る子供の小舎の中をはなれて
走り出かけハ浴ニ参り
彩霞ニ紀ス
「年月ハうつりても笛竹の
名をはなれぬ梅園
加ゝ版錦ハ小田原系大丸號藤吉方ニ
中ぐる號ト稱シテ体ナリ先角道達似物

これハ名所墨跡寺ニ遅レ人思ふべし
早朝宮ニ立酒田川肩喜まの手海ヲ戻テ
夜ニハ小窓後の殘ヲ見てより鴨きしく
大坂諺ニ寄ヲけるて小西行庵古跡野立候
阿り面り歌ニ
○心は記すも色はあられ野を川沢の野分哉
大福ノ諺ニ香餅ニ名物ト賞ヘイテ休ムベシト云
け宿ハ当餅ハ好物なれハ見試ル上ニ嘗ハ尚ホシト
嗚り 不思服ヲ肥し
△是テハそれ香餅と云人ヲ服熱おもふ 大坂

此邊ノ海鮑鰯多く在ル馬入河を越藤沢より
江ノ島ニ到ル小キ舟渡シ有リ越嶋ニ上レハ猪以泥合船
有此宮ニ入ル宮料極上品ハ金壱分より中於々なり
是より沖りの鮑壷焼ハ本膳ノ先ニ酒肴出ス魚ハ直ナリ
海ニて摘ん故極新ニ鯛の生作ホ二重テハ甘ハ強キハ
他ノ及ざる処ナリ實美味佳品上塩梅ノ仕方感ニ絶せり
篭ノ品見事料理すり又貝細工数種物産也
「江ノ島のなやさしく鯛の味
汐干潟トナリタルハ雑天ノ窟ヘ到ルトキハ疊ヲ敷タル如
テ長八十八間余廣ハ廿五間程ノ大盤石ノ上ヲ踏テ窟ノ入

口ニ至レハ洞ノ高壱丈余り巾九尺奥深キ六七十間斗
弁財天前ニハ燈明赫々タリ洞中暗ニ燈火ヲ照シ参り
汐満ル時ハ盤石ノ上ハ余程深く入ルト云夫ヨリ出て山中
一説ニ彼龍潜ヲ楽従是此所ハ鎌倉ヘ腰越
七里ヶ浜袖ヶ浦杯相模灘より入海ナレハ暴風ニ節ハ荒
極しなりけれハ長閑ナレハ則ち稲村ヶ崎又晴ニ漁舟
業も面白く往昔鎌倉右大臣の詠せし「渚こぐ
海士の小舟乃綱手かなしも」とハ實ニ目前ニ景色
風情ニて古人ノ心思ひやられいかく感情ニ絶
より獨り心面白くありし立帰りて

「漁する業とてなく浦ゆ流して
おのがまゝ絶えし浦に住けるか
浦の里人あり厨忍ひて中にゆく鎌倉へ入し鶴か
岡なる八幡宮に納宝物ありて宮ハ治承年中より今に
美麗なり
「梓乃八幡乃神ハ鶴か岡なり
今流法世鐘なりし栄え座さん
浦門おそり浦々流るゝ遠く見渡せハ一筋大道直にし
高砂野下彼備光義カ言モ斯ヤト思フ斗眺望遥に
並木の老松雲ふに従年ハ海乃波ハ梢吹沖津風に

たなひく千代の緑座洗ふに似たり猶く其の
風景おもしろきゆへ
「年を經し豊の恵みにいさ宮ん
ゆかりハ栄えし鶴か岡の月
八幡宮西ノ岳ニ星月夜の井トテアリ鎌倉の盛ニハ
白昼ニ星ノ移ル故星月夜ノ井ト云伝ふなり今ハ汲人も
なく荒れて叢となりていと哀れなれハ
「星月乃移りゆく身にすまぬ哉
汲人もなき鎌倉の里
鎌倉織りて程ヶ谷に出神奈川ニ一泊シ翌朝

宿之前河岸ゟ縄手品川御留ニ入

一 並ひし我月折も昔まゝく

一 虎なくしく武蔵の原

やゝゝ日の移りより茅場町荒井藤兵衛の

酒問屋ニ入、翌月十五日まで逗留して

十六日早天日光山御祭禮一覧ニ出立也り浮谷

千住ゟ出ル コカネカ原 野馬 数多放畜アリ

千住 草加 越谷 粕壁 杉戸 幸手 栗橋ヘ ト祢川舟渡シ

〈下総 武蔵〉中田 古河 野木 間々田 小山 下ツケ 壬生 新田 金井 石橋

雀ノ宮 宇都宮 野沢 徳次郎 大沢 今市 初石町 日光

四月十七日御祭禮拝見せんと出立相待折悪舗雨天

ナレ共御祭祀渡ル遵路濡奈か良一見ス

警固

一 先鉾二百筋　一 弓五十張　一 鎧武者貮百人

程々緋覆掛ル

一 鉄炮五十挺　一 長柄鑓百筋　一 稚児唐錦衣裳 瑤珞 五人

一 緋衣着ル馬上 僧兵人　一 公家衣裳束着シ 宝物菅貝 馬上 二人　一 覆面三十人

一 猿子供三十人

一 十二支画書ル指物持者十二人 少陽ニテ

一琴ヲ持タル者壱人　一黄裳束官人廿五人
一緋裳束官人二人　一音楽ニテ行楽人十人
是祭奉行ナリ
一五色旗十二本　一獅子頭　二頭
一御輿　三輿　一祭典懸役人續キ行
太有増如此
日光山鐘銘　序
日光道場為　東照大権現證也　大権現有無量重功徳

台有無量重宗　奉結搆之雄世未曾有　継述之孝益彰
先烈我　王聞而歓喜為鋳
一狩野法眼　八方白眼龍　左甚五郎彫數多
一円丹幽斎　四方｜｜　俗ニ日暮シ門柱彫
インスウチンナルヨシ
一惣輪塔一基　長崎町人イトウツフ奉納　長壱丈五尺ト云　珍重驚目
一長州侯奉納　浄水大石長貳間巾九尺高六尺一基
一薩州侯奉納　南蛮鉄燈明丈壱丈余　一基
其外諸大名奉納品数多　略之

本社上り段金ニテ包之
社内中央ニ釣タル金ノ天蓋 三尺四方ト云 是則
一加賀侯奉献ナリト雖驚目
一鑁之 古金赫く此鑁ハ東を照ス光ありと紀
一 湯茶穂ノ対
一湯茶の比渡る橋しと寄るおよそ稀の瀧播富
嵩きく 山る 美しさ 銘 並 海
宮し 銭と 活 秋 茱 わし るれ
殿上 … り
… 院

神殿ハハヤトト云ル大天狗鎮座ト申コハ南光坊天海僧正
なりと傳へり 堺中禅寺ノ湖水あり 長
三里余巾有と云り 湖水の内に見ゆる湖水
流る水勢直下七十五丈の大瀧あり 上より望ハ
水網り雲霧比ゆく見るゐ不偏うし只とう
くと落る雷迺ゝ少由り両岸可愉 大瀑布ル
銘ト云ツヘし 銘金なり
一大瀑も 作ル所へく 前後 …
一 那智より 郡 無 …
山より日光の禁町不一宿し 翌日奥羽海道

本社上り段金ニテ包之
社内中央ニ釣タル金ノ天蓋三尺四方ト云　是則
一加賀候奉献ナリト[illegible]
一鏡ニ古今稀なる也　是は東を照し光ありと記
一御茶碗ノ寸
一湯茶り此渡る称しと寄るおさく絲の濁せ[illegible]
縁是
中禅寺ハ登山スル山坂嶮岨ニシテ所々残雪あり
本社男体山女体山をまくニ至ニ経是　五里奈奥の院

神様ハハヤトト云ル大天狗鎮座ト云フハ南光坊天海僧正
なりと傳へり　扨中禅寺より少しかゝりテ湖水あり長
三里ニ至り巾右へニ至り浅深しらず兄仏湖水
流落水勢直下七十五丈の大瀧なり是上より望ハ
水網り雲霧此ぬく見る事なし只とう
くしと落る雷也少事有而ニ可惜大瀑布ノ
錦ト云ツヘし　称念あり
一大瀑ニ仰ト見る所へく節々ほとして
一那智ノ瀧の比ニ無なるへし
山より日光の惣町ニ一宿し　翌日奥ノ海道

日光鉢石町ニ宿ル晩飯ヲ喰テ去ル兵衛ト云懇ニテ膳ヲ出ス人ハ向ニテ十
様ヲ御免ト傍ノ菓子店ニ休ミテ合羽ヲ着ント押廣ケ見ル様ニ様ナル計ニ去ル持テ
後ロニ菓子大壺有リ手術ハ足突当ル壺ハ忽チ様ヨリ轉落雨人恐リ遠テ起ニ問ニ
廿ニ計麁ニ二七兵破ナル幸ヒ様上ニ釣揚無キ方ヲ表ニ伝ヘ其付家ニ女房去而兵
完夫ナ怪憶ナサル八我ニ幸福ト云ツヘシ然レトモ大ニ心塞長ク怨ミ立去出来バ大変
天保銭三枚ヲ遣乱ノ逃ルガ如クコソノト道出リ午コ大急キ道中大笑ヲ生シ
○大壺の落レ壊ルヘ驚キ同章帰リテ腰浅ル也
此去陰徳ヲ失フ事ト思フヘシ　此所ヨリ過テ互ニ海道ニ出ント
日光の後ロ出店ツノ茅屋ニ飴菓物ヲ商ル有店先ニ腰掛床机出テ足ヲ
休メ一人ノ小間物ヲ負フ荷物ヲ商人同ニ床机ノ端ニ腰掛荷物ヲ下ロシ

一　ある日わかみなりかしれ横切りて行
仕方柄宿殺生石様ノ猶毛無ニ付主人手許リ庭気保
留守所ナレハ能キ如ク参ル様ニ様子ナク七里ヲ経税
より此付目膳ヨリ見れば手付ヨリ陸奥街道様
通りもあるゆ傍ノ茶店ニ入一息ホツト疲レヨリ休ム中飯ヲ
喰ヒ夫より奥路ヨリ行くト無おス道中
既名休泊ニ車輪ニ是ヲ除ク参ル事死斗り
行縁ヒとり　依夫弥信夫小笠原ト云ル賤河の
大不思議も勝て程ニあらしく街道通る手の方へ立るを

休息スル某先生弟子居テ又続テ彼方人モ入テ弟子ヲ合シ述ル時ニ又清家備
不ト立来ルハ床机ノ端ニ腰掛ル荷物ヲ側ニ置シ東ヲ乾カス物吸ヒ煙草吸リ湊ヘ入水
ヲルモ何リ相見敬礼シ背物居弟子ノ花ヲ大ニ周章 我ホモ見急キ御ふ
サスカ可笑シ名札共懐ヨリ出シ女ニ与ヘト旅情ヲ慰ム可シ
◎鶏明和十方ニ名札ノ前物居能ヲ為ス飛ヘ花んたへ備
此経勤納リ又弟子ニ入奥ノ路ノ道居ヲ召

出ト思フ途ニ出道ノ向ニ一ツノ茶屋ニ茶ヲ
ヲトく東ハ居ニ入休ムトテ向ヘハ主ノ日中組ヨリ見ルハ
我国京ノ茶店ノ如ク東ハ長サ十三間横七間ホトく
奥ハ御路ノ出スル時ハ此横七間ノ越レアリ山ト云家
絶ス仕来モ稀ナル道ナレ共芒ト茂リ続キ湖ノサ
云ん力ナキ義ト番所ノ云ンいさ行んト云茶
彼方スノ東ハ主有ス名札ハ実ニ商人カ出シぬく芒
資史ニ余リ道中ヘ半道シぬ何モ道み
雑キ所ナルモ不得止ト血筆盛ニなす書
此人ヘ先ツ立テ見ント飯ヲ食ハンタリ

芒屋ヲ立テヲ京の七里と

此経動細リ文庫屋ニ入奥州路ノ道ヲ問

此ト日光ニ後口ヘ出道ヲ問ドモ一ツノ茶屋 菓子
おしく南ノ店ニ入休みて問けれバ主ノ曰此所ヨリ入れバ
我國ニ及の奈良の京まで長サ十三里横七里有りく
奥州街道ニ出ルニハ此横七里ハ越ずバ出る家
絶て住居も稀なる道ニて芒茫々あり淋しサ
云ん方なく然ド昼間りとていささかれんトなし
彼ナスノ原ド主有人なれバ実ニ商人か少しぬく芒
野夏ハ余リ道中四人斗通しぬのも通りみ
雑事所なれとも不得止血気盛ニなる事
出へ出んとくえんト独て出シタリ

「
芒原をおしわけ〳〵の七里を
あやふみなからも横切りけれ
仕方概将殺サ君狐ノ附も無ニサヘ主人ノ許リ夜気味
悪キ所なれハ恐らく気味悪く雑ニて七里ヲ延ひて
より此所ハ目的ヲ見ると年付陸奥街道ニ出ル
通りもあらず倭ノ茶店ヘ入一息ホット疲レヲ休メ中候ヲ
漸しまより奥街ヲ出たれバ生ずス道中
致名休泊ホ車盤ヲ止ヲ候く急ぎ所けり
行縁もなり 極大離信夫小留トいふ所の
大和田町も晴いりたく衛道ありの方へころき

山より甚山ハ半腹西方ニ存する温堂の如き所ニテ
其年のよて清ち寿代く佳景なり
〽名ところも千ち形まて見へなから
志のふ小嶋しと誰か云ふ哉
此所より御ほたそこ池島か沼の花見えたり
思出すとそ見えけに杜若に似て菖蒲四つ咲関哉
逸蔭は然なり池島か沼を見るは数百坪に八
彩られ花見えし菖蒲こハ古池風より見へすより我佳浪
図ありため菖蒲を菖て同じ脱て五月四日夕方
散見見をも菖蒲も帰りありし

○ 好 寄

菅山是能亭ニ遊情
〽むかしに莉姆く彩小宿りし母
國なる何風あれ寸何う見えれ
〽むかしは只夜出しより懐夏乃
何さらの波と世にみ志ふきれ紀
従是
わふくま川大河なり此所よ越く　タケノ木明神社
タケノ木の松ちと名取河に来りしく
〽埋木とあらはすれども名取川
世くふ使く誰か知らん

仙臺ニ接シハ町我尾張稲ニハ行ク程ニ家四ツ辻ニ
至ル迄ハ城ノ方ヨリ松島ヘ通ル道凡壱里半
町続ナリ 此中奥ハ南部津軽ヘ通ル街道ナリ
仙台ヨリ松嶋ハ行程五里ニ而先塩竈ニ至リ
塩竈大明神参詣 微細閲スルニ
松島ハ扶桑第一ノ佳境世ニ好事家さしハ無
言ヲ尽シテ称スル所ナリ 塩竈ヨリ松嶋ヘ渡ル
舟路三里余ノ間ハ海上ニ島々ノ数ヲ尽シ後ニ
峙チ或ハ伏シ或ハむかひ或ハ抱キ招て 松樹
枝ヲ伸屈シ其首尾ヲ粧ヒ凡嶋根ハ浪有リ

されバ白く上ハ芽朶生り而麦し
塩竈明神山上ニ鎮座之宮前ニ和泉三郎
文治三年寄進の燈籠あり 其外の町ハ大分
之個アリ 相つゞき田村将軍討夷之時至観
敗ゆる所と 小島の廉ハ地つゞきなる海先ニ至る
又海舟善光寺の許あり 故く雑く給ふ小黒
浦ニ至り 至て浦山ニ雲林古跡 雲居禅師
石窟 枚挙すべし 自遊あらん 数里ニ見渡す其
詩景殆ト眼ニ至て天す所 眺望ハ風色
花濃なり 伊勢ゆかりまて 又 六十余島の

海上の雪と
いへる題にて
よみし歌也

中〻くいひ叶へく八河まト塩ヶ母木仏と
いふ方ゟ母色分もせんわくく面白
と云けん　佛頂口
○立帰り又も来て見ん松嶋や雄嶋の苫屋波に荒すな
○素ゟ松か浦嶋子そ見盲ひ心ある海士ハ住ける　素性
○花紅葉稲妻と名所の詠あまた杢か浦嶋
○松嶋や雄嶋の磯によりかくる宮羅を万数も住る遊士
○海原くみえわたり波て松嶋ハ康の子聖不雪の曙
○塩竈の浦舟さして松嶋の波ある見父北面白き詠

松嶋と云ハ宮城野ハ何んと心さしけるハ
「咲をかねて見まくほしきに萩の花
いさ訪ひ行て見しみちのくの原
「萩の花咲出る頃も名にし負
ふみちのく露の宮城野ゝ原
○壺ノ石文来ん
奥州宮城郡市河邑より多賀城の址に阿利
其碑の面に

多賀城

去京一千五百里
去蝦夷國界四百貳十里
去常陸國界壹百十二里
去下野国界貳百七十四里
去靺鞨國界三千里

此城神龜元年歳次甲子按察使兼鎮守将軍従四位上
勲四等大野朝臣東人所置也
天平寶字六年歳次壬寅参議東海東山節度使従四位上
仁部卿兼按察使鎮守将軍藤原恵美朝臣朝獦修造也
天平寶字六年十二月一日

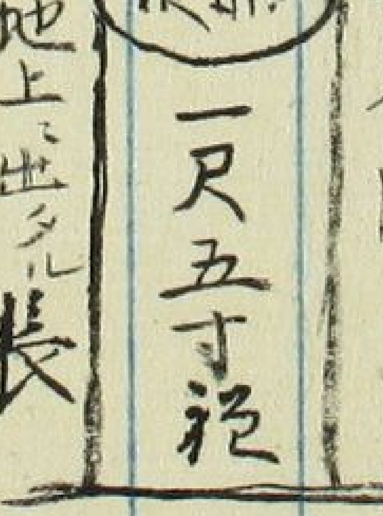
一 明らく黄昏させぬ月のかくれ
いにしへの見えれつかの石文
○野田の玉河 末ハ今ハ田植ゑ宮前なり
一 すさく之は野田の玉河せに入る
宇ゆるかあなたり 紺まそふなきり
末の松山見る〻
一 みちのくの末のまつ山 志ら浪
さゆるに見はるる天の田鶴なる
概今ハ東り一面ハ農家なり

一　蜆志らぬむつの浦は概念哉
家とる蓄うし馬數
家居をまり須賀川とある河添に来り
河中銚岸しく高サ壱丈余り河中弐拾丈ト云
瀑壺ありて深サ不知簗ヲ設テ鰐をトル
此簗の鮭を公儀献上する品なりと大さ弐尺八寸余
志かし尺重なり東ノ献上済さる故商人ニ禁ス遺憾
一　河しらぬあまく日影に白く河たさ乃
せきかね柳ふ須賀等ん北鰐かし
○五月雨の漲りて川せく水出る所さ不思紙探アリ

是ヨリ邑迄ヘ下ツケムツ境あり八ヒタチムツ境有
常陸國苳山生二王トテ朱塗ニシテ斗帳ヲ霞復日々
護摩焼一度料金壱分なり毎日五度今壱両一分位
不絶有テ其賑ひ殊樂せり
○下總千葉邑一ツ二王トテ獨リ有テ邊ニ堂社壬
不見不思儀なり
○常陸忠来り河ふアリ・河とこ水有く遠く
志るかなれ不えへ作不思議なり
一　流れ水の白浪志つ洪ね哉
未ありし河といふやるさ

○常州茨木郡水戸ノ城ハ上町ハ町なり繁昌し
○八幡の八幡宮ありと云 薮アり 其左黄門ノ此処ニ
入りて掘出されしと云り
水戸城下ヲ出て行て 一里にて 鹿島の宮ん心さし
ゆく程なく千町走里て 四里ト云 大原を過る
先黄門大ニ労康涛の御ミ差夕篆尺余る柵也
そのとき見取入れし
一 要石ハ 鹿島の森にあり 明神ニ本
重さ乃力へり動 云
鹿島大神宮境内広き森植込 広大の中に要石ト云アリ

地上に出たる所凡壱尺五寸程
深サ大地の底まで届くト云り
水戸黄門公人数にて堀セシト云ふ
一 千早振神の宮居かこの石
うごかぬ世をかなめとぞ知る
○常州一の宮
香取大明神 当 鹿島。香取。息栖。何れも
海辺なり 銚子に入海あり
銚子の入海広く舟にて有河弥先まで家并ぶ
成田山不動明王詣 其所に一泊入ル



要石ノ図

一 當今の東の兵糧と云ふへき多田山
世に薬として常に用ゆる座ぐん
明星傳前丸
塞諸品九尺小間にて奥ニ渡戸勢堀丁酒問屋
滋丹藤蔓蕾方ニ在ル二泉號日光松風旅籠ト
同新調シ衾弐人前彩文縮緬様ア裏真綿入ニ
夜具設ケリ其夜より結構九品ニ中ニ麻事編高
浴ニ施スナリ又酒ハ又町ハ店子供ヲ以人来リ臥具ヲ洗
出来上ハ湯ニ長ク思セ志ありて是れ旅ノ何寧ニ大当振ニ
別ニ稀ナル共中々不少入

問屋ハ男世帯ニて朝食ハ醤油下地吸もの肴煮漬
物盃会ハ鯛ノ味淋焼或同割煮又ハ片皿鰻蒲焼及種々
手ヲ込ミ器ヲ換へ夕食ハ七ツ前より酒肴酒を通番役ニて
集会ハ馳走卿会饌ニ家ニ有時ハ何の寧ニ扱ひ多く
扨おく節ハ両国の寄席ニ出講談浄瑠璃上等
或ハ是ヲ噺ひおもしろく様々ニハ麻雀び座ア講釈
出実ニ勿論所柄極張而奢ナル食膳をせらる或ハ国本ノ鰹
長焼江戸随一トモ云ヘキ上等ニて飽マテ鳥焼酒漬
山鰻仕入焼キ菜漬ナリ色又伊勢太ト云料理茶屋ノ酒肴
あり或なり ○小倉庵志かるに鰤上製座敷拵際

未行の麻裃紀ほしきみり穂ニ出するほとも
唐茄ハ遂ニ布上ニ奥州ノ金花山ノ下ベラキナル座
ふらんハ寒ニ粉ニ陳ひ小間ニハ切合ニ湯多キリ先
吉キ魚ハ唐黍ノ細末糯米ニ田ト菜等ニ粉ヲ大タ入
桃美色ニぬし白小豆之石餡まて彼桃花色ノ餅 三子五色
壱口梳入ト持ちたり極く類の上あれ一座酒醂酒盛定ニ
香ぬの風呂最初鍍ノサニ味次ニ漬物其節ハ候
本風夜大根沢漬極上塩梅九ッ出ス次ニ味噌汲
ね根蓋汁中追々添門丹極ノ煉華美ヲ及ひ
婦くニ馳走甚しく不尽盛式目 吉原川逢中

料理屋ニ而乃スツホリ煮ト云テ方角ニ而洞鍋ニ
味醂醤油ヨシロニうけ並座敷ノ酒池ヨリ大丸鍵ヲ
摘と浮ずる中清浄の上京ニ至ル白銅鍋ノ中ニ入テ
煮之味つかり一億肴料理秘密なり
従是五名米出ニ段ニ其ヲ吉原ト極リ大門口ニ入
中ノ町俵屋某カ二階ニ上リ一杯飲タ太夫ノ道行と
見りた追て出来るニラニ三ノ姿深安思のぬく結ひ下ケ
帯ニ錦織ニ相風凰松ニ鶴霰ニ蒸気船ニ風虎雲
龍獅子牡丹今ハ孔雀と報ふく其物端ニ裾祗ノ
兩まけ三千余り其布しる有様花中の也 足跡の足跡

立かこ人寄り大傘を指かけ出て島たま秃二人
太夫の両に添ひけり数多なゆくれ中にハ一際
勝れる太夫有つたる美人の如く角玉屋
若紫と云太夫出来けり其容貌天女が粧
ひ忍びしくも色りを掃ツくし出り有様
感に絶へ後藤と見送り何ましと我をたとく
惘然タり眺めに推時分なりけれハ俵屋立出て書添
侍ひ大まかに大店久喜卍屋へ入先酒を入て後
存補に通ひ酒盛り成同じ又太夫ノ自分
緋屋へ伴ひけれハ蝉帳紅閨にハおかぐ拵其

室中には元の巻く薫て居申時ニ白遊蕪之器
品其外諸國筆硯及貴る物品美しき
書 実ある風体あり 太夫ハ離坐し人
小座敷ハ新造禿ニ小人計り居りヨイランたの
方に役有 襟の上を払ひもて揃へ開静
取捌に次ト蔦る太夫の名紙は五段を取
併残状も名ハ合ふる蔦重料紙硯秃
持出しけれハ酔ゑ案し一案し多數一首 字
〃 吉原の中ゆかて花の名に逢
縁を白へ分となん好めのきぬ

また二人宛り大傘を指かけ出つ男女共二人
太夫の姿を添ひ行き数多の中に一際
備へる太夫の黒髪[illegible]長く[illegible]

云 ら 後 添 く 結 粧 色

雪月[illegible]数品傳り[illegible]
[illegible]太夫か粧ひ[illegible]彩色[illegible]二人
[illegible]太夫[illegible]座敷[illegible]
[illegible]名を[illegible]
但し[illegible]
〆 [illegible]はふの中にも[illegible]名のり[illegible]
い 縁日 白へ[illegible]姫ゆりの花
◎ 唐後頃[illegible]くり返して読み[illegible]
〆 はなはたをみやひろる人にあふたかな
〆 よしはなく花さ[illegible]

一 百千とり囀り声ひとつにみだれ
志のみ孫々とも此日傳し多れ
弐階座敷にて自然と雑談も出来ければ床へ入
私回するは新造座敷で数々見物立けり
数々座敷へ通る繻地錦立ツ雙六形共模様の金衣数団
繻地錦の繻綾の几帳面揃へさせ八寸計枕は同錦繻緞ノ
錦り枕二ツ並べたり頃は五月半なれ共絵屏ては涼しく床ニ入
身体凹ミ込み心地言ふ方もなく姫様来れば繻綾
綿色の長襦袢着て雪の肌へは狂ふ一寸も敷き容顔
美麗なる事は真に繻被唐綾の色よき肌は玉の如き気力

艶色ありける様子錦繻綾の夜具作く
膝枕にもなれば嵐は巫山の夢とかわり
一 如斯なる黄昏より錦の唐綾の
夜床の事なき夜は錦絹の月
更ける後も志はたえ一夜も早く晩がなり
一 扨まいなれぬやめ声に口は恋衣
悩れは互に別れ惜しき唐綾
一 返し 弐まとれ思ひなるものぞ情もなし
早瀬川の月も小舟乃綱もまま
寒きまくも妹のおもかげ

明ぬれハ朋友共皆打出るに後しをみせしと共
連立帰りゆくり且相手敵ハ千代会より文廻定
歯のなる夜のお人へ答もと捨たり 此家ハ角の
玉屋山三郎方へ世話屋も大まつた大店なり
ようし出し新造禿自分部屋持まてく 諸事
美しき事を知らし皆揃ひ切の美婦なり 此夜の
太夫ハ此太夫と云ル名なり 至ての風流にく 極
外面を見へりハ腰折一首 口すさみなかし
一 世にあらく名も高くまして 此太夫り
色ていまた 婦しを誹り草とん

此太夫にゆり行末さのし 也
一 此太夫と聞ゆしもうけぬ 嬉しさに
名のミはうもふ見ふうけむ
此里迎ふ心中を立よとけ西ふくなりけん
傍に禿の床会ハ濃紺地錦雲鶴の
深掛紋緞なり 敷同様緋緞凡帳面家凡
八寸枕目録の備り枕箱黄金蒔絵掛一対ならぶ
此日作る娜やかに心やさしく 能造早くも新造
禿の目配せハせ退りて 容易に揚中しく流情ある
事哉んなふ絶まり 大店ハ実に上品之

「おもひきや世のわすれ法師に出る人に
うきもしれぬ梅をあらぬ思ひとは
嬉しくもあくれ
「侘独の詠ばかり秋ありさふそ
君この美人醜ひと莫かれ寄りかかり
文月も荒凡雑交り也けり誰りの侘不忘寂入的活る
ともかくも去りにしたる眼覚てや
「我せこう寐さ給や早んと物いはたでと
あふぐと撞暁乃この稀ト
ひ挽さう五詠夕月夢心山吟不ト月覚く

別しこゆみも

「妹しく我わすれ別もう此あすりさみ
鏡ハ夕月りいやまさりうき紀
「今ぞまさしく別るなるわきめこう
あるまは向の以後ぞ忘れやう
名於不書登日早日傍立出なれハ共に帰
路ト守りけり
酒間席浅井藤右衛門其家庄云義也為猶屋敷
松阪竹河度右衛門なる家なり御今方に勤定
其のゆ依れ是方より此縁坊を占ぜ依納得ふ
よりく云義西の九条邸羽揃撚の伊丹

遠ノ鷹羽 浅
紋ハ麻上下
着ス

酒造称木村紋十郎山中権之助ノ人野沢喜多
某らく明上而勤之所へ案内一人をつ罷りて
草庵まて三ノ丸御門ニ入向ふハ蔵前ニ尺ほど
石朝野家登城上中ノ人杉本安藝守殿も残
備ふ草庵あり左仍之隣ひり大玄関見附
今ノ葵紋大サ直ヲ入斗あり安藝守殿ハ玄関
裏ハ廻此所より上り時ニ次ノ間板椽ニ座ス此所へ
後ニ案内ノ力輸造所ニ除く行程ニ間毎ニ
其廣大ニ候事ハ難く尽間を経て御子畳
敷ニ至ル 柱の廣香敷四方柱ハ長さ三四寸程の角柱

数限不知天井ハ門柱松ノ組天井面取組子地面ハ緑青
ニテ彩り 床ノ間壁面其大キ鷺目たるく様ナ高サ一丈
余り巾八尺程も有り金の霞若松鶴狩野春川画ニ
引ふ八今の水の形中に葵ノ紋付チくり直中ニ黒ノ總ヲ
通したるニ垂タリ此の手大キさ凡尺半巾八寸程ニ見ヘタリ
中々数ふるに追アラス微細ニ閲ニ難く手盈ニ拔ノ向ふ
板間ニテ廣大ナリ其隅ノ方ニ雪隠有小間四面ニテ黒塗
縁ニ段アリの至て数多り未夕不用由ナリ此の手置たる
間ハ御諸代ノ諸間其ノ裏ハ廻ニハテイカンノ間ト云唐人ノ
画ナリ其次ニ能舞台御殿あり床間ハ長三間巾壱間奥サ八

七寸余リ花林ノ亭板色合ト言、木目ノ細密稀世ノ一品ト見タリ
臺面ハ長弐間巾四尺余紫檀亭板板遠棚同紫檀ニテ中央五寸
角程ノ紫檀柱棚板ヲ貫キ金ノ金物纏メタリ床ノ内ハ張テ櫻ノ画
也上段ハ公方ノ御座次ニ黒玉縁有御三家次ニ同玉[illegible]國主大名其次ハ諸
大小名トナリ此所重衣出シハ三間五十間ノ長廊下ナリ是ハ諸大名
時献上物差置処ナリト云向フ見附巾三間弐本ノ帯戸紅杉柾一枚
板之狩野家筆ニテ極彩色孔雀画裏面ハ白鹿[illegible]香猫四方白眼画
此廊下ヨリ出レハ大廣間アリ向イ御白書院ト云ル有其奇麗古金纏タル
暉邊照ラシ其美ナル不出言是迄ニテ帰ル真ニ生涯ノ思出ト謂ツヘシ
○向フ嶋ノ[illegible]ト云[illegible]義[illegible]ニテ此人ハ依頼シ庭[illegible]の

[illegible]荷ナリ紅葉山御殿一説ハ其庭中ニ水廻リ来リ[illegible]
瀧となり流るゝ庭を巡り奇樹怪石見えしく[illegible]
五十三継ノ体アリ十八丁四面の廣庭なれバ[illegible]の[illegible]
[illegible]作モ[illegible]四方竹モアリ朝鮮芝一般ニ蔓リ
[illegible]御殿先ニ[illegible]の臺あり[illegible]
[illegible]
一
[illegible]庭の[illegible]流れて[illegible]
不[illegible]を[illegible]り仰げるこの[illegible]
紅葉山ニ廻ル水ハ玉川ノ流ニテ云義之命ヲ得テ遠クヨリ工ニテ
高キ城内ニ瀧ト成シタル其工噫呼奇代感心シ絶テ各別恩賞モ

可有之處ハ無クシテ深キ所ニハ一生終るまでの風情

可憐

◎玉河の流をくみて緑系山北流とハ錦手ミなるけりや

愛宕山ニテ杜鵑殺たり

○愛宕山松の木北間ある松も武蔵広中ハかもどちらより嶋

芝増上寺ニハ台徳院殿秀忠公御霊屋是アリ

唐銅の燈籠実数アリ　門々灯籠石燈籠唐銅有り

有章院殿家継公霊屋六十七万八千両入其費ト云

霊屋の上之間石面の一枚石是長丹後寄進也

御四隅ヨリ柱ヲ建築ナリト　勅書の御額あり

蜀紅錦　茶地あり

芝泉岳寺ニハ大石初四十七人碑有

一　仇討して霊並ありさありし　大丈夫事

いとも武士の名を芝ニ残したり

或ハ上野抔ハ高キ茶店より東南西ニ方ヲ

見渡し品川沖より房総迄大洋見へく

他ニ見事なり

○東都の都ニ武名所ハ其の上野寛永寺

寛永寺関ハく

○東叡山ハ寛永寺関ハ名のみならず広大とて見物の地なり

上信界あり

酒同屋拵ん三十余日八月江戸ゟ発足帰路木曽
御道板橋より驛々休泊ともなく志ろ須
十日旅中九月半雨多降あり上諏訪に着
無事に着しと室ぬし悦ぬ八半時過より中飯を
おもト云備の町尻留宿名物蒲焼ニ膳に肴
板有足くく吾分は多年んと進り菜安桁過
此家へ入故は鰻沙へ前亭主面一間へ入休息の間丹
蒲焼調しぬハ先焼物味をよろ二四半と出以来ぬ
訪上諏訪蒲焼ハ嘩ぬ美味しくく不思義
はりと肥

一 珍らしく吾分を茄子の蒲焼に
香ふく多くは云備前名産や
夫より安中坂本より碓氷峠にして
一 言ふ見れハ雅也濃き景なりけり
一 月しみと刈ろこ夜木立この郷
甲斐国の高山八ヶ嶽雲上に顔を見せし八
一 甲斐の根ハ此處を過ぎ何まで八ヶ嶽
嫁しけとはかりあやまれ也家
甲州より裏富士みえくし此ゝ水出月中段より
○天保日記を始る戸奔小従年へ入り雪聊しく残る富士の根

上田と云ふ所にて蛇抜山見えたり
一 ここより程近き所に
蛇抜山有り 此所也
雨中丹波川舟渡しを越え善光寺町迄見れば昨年の
大地震にて皆類倒し候上残りしは僅かに家
同様に候故に紺屋にて先年丹波屋平兵衛と
云ふ宿へ尋ね候へ共此者は類焼にて東の方に
罷出候の宿屋前にも今日の宿は十日迄で
実に哀れ成り 地震の節は家にて百八十人焼死し
申し候 扨何れも門様に家を拵へ丹波屋方へ入

一 泊り雨数々降 其より善光寺境内に至れば大門
様ふる人結局去年倒れたる由 其御堂は大破
損にて共々諸人群集 寝所にて損なる家のやうに
参詣の人皆南無阿弥陀仏と唱へ 又我等参
血九ヶ所後生頼み 我等の身に有るは一生の大
一 極楽に往こうや前様は仏
一 光寺に阿弥陀仏をこの身の門
一 大地震の無間に落ち来たる者
様の何れさへも行かれず
其夜通しにて降り 地震も大分にて騒動致し

中々止殺く此ハ宮敷手中戸隠山の頂に九頭龍
権現ト呂なりこれ山嶮くメル岩石崎ち巡り耳り岩人
計あり穴ニ倩く守護く給ふ人家ほと用く米一升
ヅヽ御供物ハ是ノ物御くあり里人曰ハ此山ニて美人ニ
逢ふタラハ直ニ傀ニ再見ゑるなかれ下一命ニ拘る計り
某ハ先年越後柳原か登山せし事有
「出くしけ 二てら家ニ心より来り
合しなりヽかり戸隠の事
山より丹波ひ手りらヽ支へ丹波へ回し
行くえれハ給り前後の大事こ丹波川の渉水

丹守の小家ニ至り渡らるヽ越みもし川揚ます大河
流るヽ一面ニ白海如く中にも流れへく思ひも
よらぬ人くるなる越る所に丹波迄ノ男一人来り渡へく
抱るやうなれハ此ハ丹水舟出べきとも先ぞん釧
此ある人の旅客越舟ト乗り浮兵衛石私方ニと申し
夜ト不言殺しせ海色あるなれハ梓さし位ノ手
備ハ殺杯ニ人費くなれハサウハ先舟を出し心と人
せんと舟人共曰人名ニ梓る河端ニ水上へ先
少捻ト揺さし心も最早此処より河中ヘまめる
へし名細川あく一大事なり松くと云て渇巻立

まする大河の直中ニ舟さし向ヘハ逆巻くる激流
飛行ハ大膽不敵ノ四人も目の前の如く船ハ矢よりも
早く棹楫筋力ヲ盡し難所ノ中流の瀬をのり上
四人互ニ面ヲ合一息ホツト纔ニ舟中ニ立休らふ
大丈夫の中胸の気休みて漫し満々深け不知也ある地ニ到
りぬ人なきハ案内して冠り笠の上て莚敷おき笑る
三十余人なる所ニ瀬の騒きハ乱と深さ一とも知
條ヒ難所をわたり後ハ丹波道ニ寄りて出 程
稲荷山より邊海見え嶽前見えて程なる中窓打
福道領ハ東ならハ御陵の大橋大名の為にて福路の

驛ニ入る旅泊の宿ハ海なも無か々せんと思案し
中是く旅人来り語らふと郷人ニ噂合する承り
山中ヨリ十里程難所を経テ福島の町ニ出る道アリ其
中に嶮岨にて人跡絶たる事なれハ其用意ニ
十分ナラテハ不叶其上此山中極難ニ少しの中
昔より漸く岩石も又若したれハ速にて事なき
狼熊其外悪獣多く人をも山中ニ入獣猛獣も多く
岩角を攀ち蔦葛に取付くりて高低なく
且風雅の心ある常ニ深山の中に猟人の家
見付たるを探り此家ニ狼猫なる者の

此家ニ微細ニ開キ枚ハ細丸成ヲ施シハ蓮ヲ湊ス天井ニ
釣ル白黒長サ壱丈余リ中七八尺の大蛇の皮掛ケ
ニ人ヲ畏させ世ニ珍らしき品なり 備前日銭ニ代へ
あり大物獲たり 此蛇ハ尻ノ尾カリナルニ又ハた
多説の事ハ八ツ又成ル穴アリ深山の蛇ニ云数年し
功ヲ経テ大蛇ニ成ル事ハ恐しく怜も黒色天窮(?)職
に其実価ハ今ニ高値ナト云ハぬ何にも欲しき物ト
丸ニテ見れハ長毛ヲ有り抱ハ又丸の長サ七尺余
見れハ津リし物者ヘ解ル中ニ云フ此頃ハ道中
皮類持出リト云フ 雲助等ニ通しテ云フ然ル是大的後當ニシテ

云ひ其可部可清品ニ道ハ遺憾ニ成る 又猿猴の
勝負初さぬく珍らしき殺アリ
此家ニ皆話し
「 家より攀登に於てり 備前ニ出て
雨さへ降る中川木曽の山越
家ヲ出て径戦ヲ成る険岨ヲ艱難辛苦ヲ経て渺十里道
跡彼方福島駅ノ町東ニ出テ山中ニ桟ノ大木数限りモ
あく峠より
〇小木曽ノ谷ヲ成る長サ水色勢ヲ逆浪
白浪天ニ漲り渦巻ク水勢矢ヨリモ早ク岸ヲと

沸くあふれ山道是か為ニ崩或ハ浸シ又山より流波
湧出車尾谷ヲ梱家押流し御存の絶方数ヶ所ニ
絶ス通路ハ仮ニ丸木ヲ渡シ往来も漸く往ば
とられ又不雨歇故一生懸命ニ力ヲ励シ岨ヲ山路桟
を渡一すじ先ト艱難ヲ厳ク只山沢渓流ヲ忍ヒ渡ル
難義一日十里の山路ヲ三日間雪凌難肖
幸ヲ得テ重山も渉くがり河をも越レ今ハ命
拾ひし心地せり

一 山坂流レ[illegible]限りと凌来ル
今宵ハ安き草枕の旅

夫より
名古屋ニ出テ千辛万苦忘レ一泊ス是ヨリ
彼大無のお役とすまし八大ニ喜し馬籠ニ用ニハ
今取百姓ニ之可借用ナリ母そち多見家ヘ
之し 旅の労面かく

一 名残[illegible]書き記し[illegible]旅
宿

嘉永元申月吉

國芳

高井國芳

高井國芳